

資料室だより 62

国際音楽学会のなかに Cantus planus という研究グループがある。このグループが中世音楽研究所出版の *Wissenschaftliche Abhandlungen* というシリーズで、イストリア(Historia)といわれる聖人聖務日課を出版しはじめた。聖人の伝記や奇跡物語に基づいて構成された聖人の祝日の聖務日課は10世紀ころから始まり、新たなテキストや旋律の創作が行われた。これらイストリアは12～13世紀にテキストの韻文化が推し進められ、韻文聖務日課(Officium rhythmicum)と称されるようになる。

上記のシリーズの第一号はハンガリーの音楽学者たちによって校訂された「ハンガリーのエリザベトの2つの聖務日課」である。ハンガリーのエリザベト(1207-1231)はアッシジの聖フランシスコの教えを受け1228年にフランシスコ第三会員(在世フランシスコ会)になっている。王家の出身でありながら貧しい人々を助け、病人の世話を生涯を捧げ、フランシスコと同じくグレゴリウス9世によって1235年に列聖された。彼女はフランシスコ第三会の、またカトリック慈善事業の守護聖人となっている。

この楽譜はカンブレに残る *Mediatheque Municipale, MS38* と15世紀に他の聖務日課と共に書き加えられたものに基づいている。いくつかの点でフランシスコの聖務日課、およびパドヴァのアントニオの聖務日課との関係が指摘されており、13世紀の聖人聖務日課の典型として注目に値する。

資料室だより56でベネディクトとスコラスティカのための固有のセクエンツィア集をご紹介したが、このようにミサ曲の発展と別の流れを作っている聖歌が音楽学の方から光を当てられていくのは喜ばしいことである。

(杉本ゆり 記)